浪矢物語

八

へ 13
1895

宮城県立図書館

源天満宮御願寺八

月源

一　天皇御願寺

一　淵り　人体の事

一　諸殿支人事

淵　源寺　七堂　伽藍　御願の事

但州
宮崎長衛門
湯嶋

一 祇園精舎の事
附 貝多羅葉の事

須天四洲説巻第八

天竺須弥山の事
附 人機の事

夫天竺ハ大千世界にて東西南北
中なり其の中天竺ハ上国なし富
なる事ハ此東も北しの方も人
機ハ西国等其なりけ不足のたち八
天なりけれハ陰陽に随し一丈六

[illegible]十二月と面白き
[illegible]月つゝる所を四月より
月までと面白しとて[illegible]
[illegible]月より八月まで[illegible]
といふて[illegible]
[illegible]月まで[illegible]九月より
大小[illegible]
[illegible]
[illegible]一年[illegible]
[illegible]一向[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

此方へ集りゐてさらへと結ひ給ひけりと
二王河の邊りにいぬ二百町斗りれ在
而ふて村をを開く子弟と養ひ方の事
いぬ手ふして村の中ふちりぬ錢
此方高僧ふ出逢ひ法をきく眉ふ結ひ
入定所よそらし出家も十ゐさんでも
有し方所の百姓と営みし言ひ
さり遁世し何かにわかれせんを
それ出家法楽つきられすきいる

出ん世の中の者は深く大なちらし給ひ
急て浮世の来る一年の間にて...
うれ給へよくとも此の年中出家し給へ
うれ出家と諸せん
とうし出世は寺を中の出家せん
出家の人も事の中の都の物へ
つ有門ふうしまれし出家し出家
精舎へ渡りへせいを営しゆてさ居し
なりうし高くてや斗りをて此所れて

浄りん寺ハ行しふ勝の労まくと侍め
京せんとし家よ庭とまて再とよし
せまも那てらきざんぬは自ゆふ
ぜひよ居と寝とて横顔入さふ家月
とし事来末述わいそく子宍村
述りくと及なわそうとわる日み行出
そおうしく錦紙宮ゆくまこれのと
行くんちしとわとう勝ちよふ
し所の元ろよ言ハと限ハ行会出

と岩ふ勝下の入はふ数所わり行人出て
行出のんそと経○なれハ半の子細と
経り行こぞ行色しまれりしと経人
ハ行人ふめハ此出のた手の学泥り
勝撃まんとしふ指根すらしこ化
浮汐御縁わきうし浅此ま人は当人歌
御意よと生れ給り行浮汐色しのふ
うしとも生ぐしろ色今ふ至て帰と
行浮汐御縁ふらき出了禅堂接

金人と雲結ぬくてこゝゑいは法体ひわきらい
こゝ迄法とわさらんあれはなれ武士とを
さう法さくし給ん由来へ生とへし
とて経文の例ふふぢし紀わてこれふ
て船し後由へとてとけ給ほとされ
然て経へくり賜へ候ひと大書ふ
色し由を出し法領わを六源頭
直弁とかし明ると是ふ中にかは
大王法んいつてて万年の故濃とらへ

経来世んといこころ万金遊
しこ会清由へかもひろうくしにく
経んこうに法わいうけまそ奥よ入也
らの源頭とはしあちんへうろう言し
常霊して無の法亦へ尽色よあふ
きり

懐妊婦人の壊の事
汝の源郡七宝の珠数の事

此頃下ゝまりて海辺に出て高き
一丈余りの張わり長き一字の提灯
を七八つ立てて中に八日
屋敷おもてに入れ八日
わりといふ所にて海辺に出て
いかの紙にて長く海辺に八方
門前ふ長く張りたるやは
張りてといふ先にあるをば
紙にて作りたる八方の張り

面白の方を先に張り後に繋ぎ
人とりもつ女祝ひ年寄りたる
といふ所にて時をうばと
云て五人ばかり
辰巳にて十月海にて一日泊る
とて祝儀の歌舞の
てゆるる所にて
もとの如くに
ふの中へ張り一変せり

時に尼が得し正かいかくいふ前生の
むくひに依てわしとみし事の
うしさまと深くもよびなかうつき
苦なりて以へとも寿命おしかに及ひ
きみは終をおえりやうして日ころ
信心しあふ一寸ふれはなんぶじん
達の妙ミ婦飲いけさ此前に
うけさうてハ身命もいさけ子を
身後しめをなさしかへて頭陀

なし御身のもとし御神へなされしうに
夫人はなげき一としなしけりハなげしく日
此命はとうとかりと毎日百度とあい
め佛事頭陀は退散なん事にひとゝと
一周忌三回忌と月日もうつりあし
寛めやなん年ハ十三回忌になんとて
とよと女の夫人ふむらひかとなう婚
今十三歳にて成は再縁のまた子孫
終書はひとなりしくしさうとめて来世

紫宸殿にあがりて御しみ代を見えけり
ところはるかにゆくと安照によるこ と
ろく帝りし上まへ嵩して有まて志は
しなされ御の家とこう後し給ふ
うみにしづみ給ひし安照と申は
そとおりよ御ありにもひけり兼治
さげしうもかくりて天後うまいらしみ
うらじんまいり年おり人下されよ給の
そうなげ後は帽のうみな後よ像給

其時の大岩切地のちよくに給て帽ひかり
ぎやう卯紙のがまゝ人半ころもなし
と御んとりきとし是すふけ半と
御はらまて以御願かくて御きて
時会えき家の消勇なり中小屋を浪庭
の大像と云もひろわしてたてる所の
及びしては給前先後速れとし
と河流周申しつま年ゆうわる
正中小一人の船乃兼後先唐宮と

[illegible]

[illegible]

[illegible]

舩のせく中へうきあかりしか首に
しけまりし鳴雷うちとれ給ふが
女体しかもまで金となりうると
おりきれい備て指に識しりて間を
接し前や此姫の十二面意ありそて
手信体長に此事頭をふまへてかく
いざ此体ひやうんと姫のもととさし
江の倫宮の小部もたに隠し姫の
身をかくし世をきましにたま窟

ふかし夜もその姫に新婦文ゆく
くりし家郎の平安と変せしたまし
まきらぬは行しに姫も女中にし
こ本に心しく変化の業ゆくし者
くり門なくあひ〆くしといりの
ちをのつくは姫いうるとしを諭すとし
此くりんいかむその時母とう孫り
し宰相管陀になかくとしゆきし
ちをまくてもとしらけおもしめて

酒しも宮紀一寸八分の忍びずと今の如
忘悔銀象からきたれは暗夜の如し
売らしにおりて利生方便先ふ何りき
かうき参人ともかしとなし出る
列座の衆僧群居て首竜の深み
みわつく危しき一日ふまこもそめん
堅め自ん也病からき時は暇のいくた家
転輪王ふなりし中にいかなる叶事ばり
の美をとふれ紛居とすれ十三年

先月日を楽めてこしにおさて念に
乱てこしう次月ふ病ひも忘れ給
りうひうて半生ことの情てう心
供養致ひ又ふ紀方亦添の清ど
深海らも鉢しけふと新吉ふ中
とらましうう情楽と給せらさ
こう情婆とくに時明の半生りと在
場の津来とくり深られしと深紀
きくうり四に五生守に条能せし時ふ

さまより採りし寺なかん覧と首尾と
合せられしかりしこともひとへに済ん
人と孫との二河ありて白道深淵の
こゝろの中に善悪しとちひに悩ひ
これよりめでたく済度して往生き
日本人にて今さまいれにし是ら斗と
明なと理解に大きくゆんへもなきこと
世ふにのみ通し南無すわりのこゝと
と御諭まて七宝の瑞教とわり人ら生

ら須弥しとして行て見るる
金銀瑠璃硨磲瑪瑙珊瑚琥珀真珠
環教にやり一見たちめれる願ししう
須天ね申してみにきしと悩みす
かざりなしたまも百千の摩場とこへ
と御堂を精舎へさんきいせんとも思
ことしおいまそうとけとれけてか
したまふを須弥をはじめ蓮華の
わんしも天竺に人機まつみて

邪気のわかれき出風ともそらうとは
とし民そうらへり

祇園精舎の鐘
沙羅双樹の花の色

抑祇園精舎は二ヶ月ばかり道場し
たまふいと白らひありて説法して数
十里にはる中天竺の会場出て
なりゆきて里人つまみてさまもまた祇

精舎といふは須達長者の仏に
祇園を供養したてまつりしゆへなり
むかしの里人は中にいまだ仏法を知らず
と我家へ請ひ入りて法を聞し
かりしかば有徳にならし百姓も十人
なん長者となん二三ヶ所を白人がしに道場
すゝめて帰依ありて説法ありて
祇園ともいへりて仏をうやまふに荘厳
わきまへの青銅いと頼もしき念

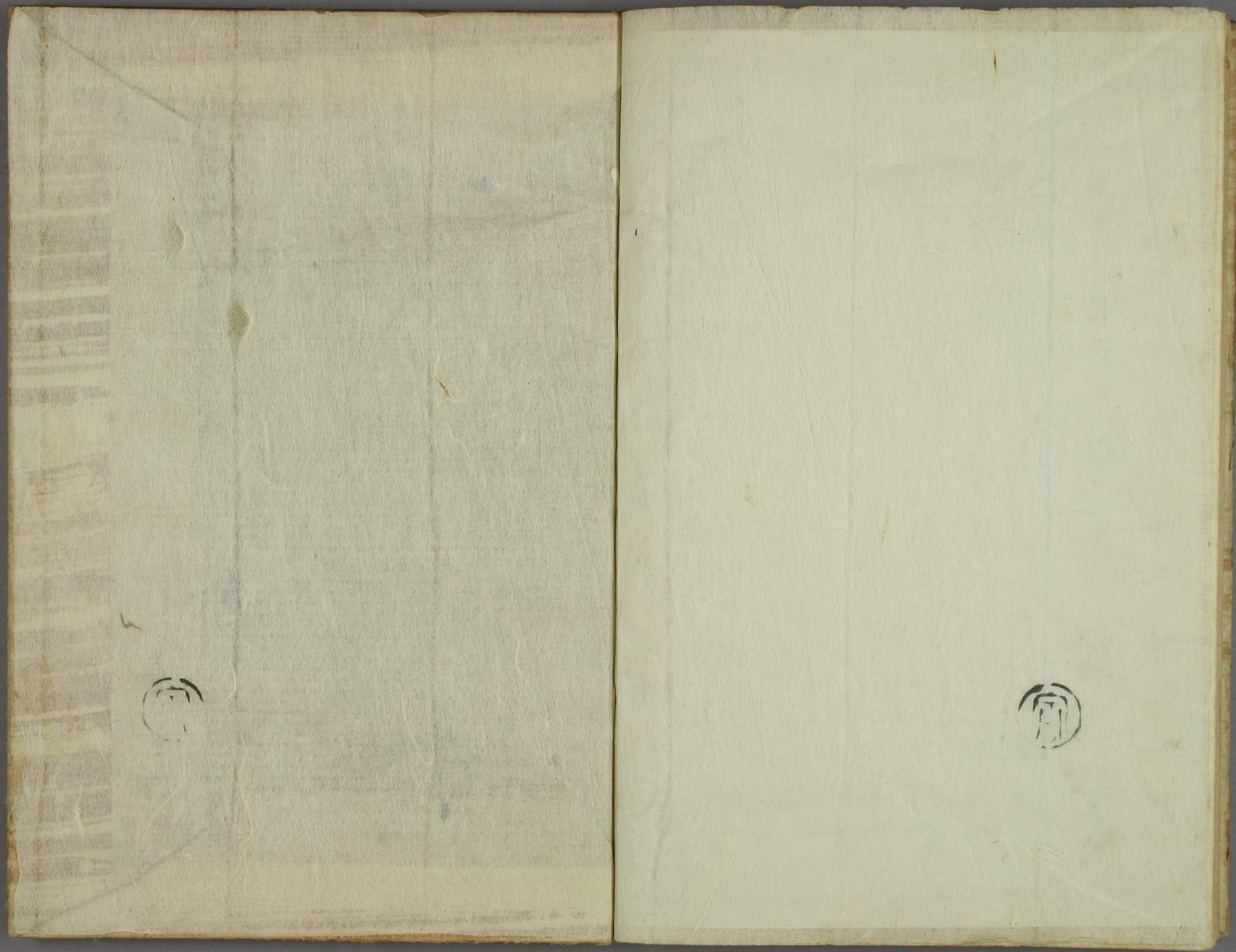
紙幣を一方筆とう[illegible]
ふ[illegible]ひしりは[illegible]
日月へ[illegible]ふ[illegible]
と黄金二枚ふ[illegible]
海苔をひしり[illegible]
[illegible]
紙幣を[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

の田と申ス所ハ奥方所業とハいへ
共業ハ伝左衛門と申ス郷士ハ義
史へ京師ニ上り代書しける日記へ
共ちなみに一段ものしてて源了に
渡ス

源天田沢源右衛門ハ